

## 編集後記

大学生の就職活動が、以前と比べ大きく変わってきているように思います。私が学生だった90年代前半は、三月くらいからぼちぼち始めようかというノリで、二、三ヶ月も経てばそれなりのところから内定通知をもらえたものでした。今の修士課程の学生は、一年の秋口からセミナーや面接が目白押しで、大阪、東京と東奔西走しています。話を聞くと、まずエントリーシートという書類を作成する必要があり、その審査を通過して初めてスタート地点にたったといえるそうです。エントリーシートには、通常の履歴書のほか、志望動機、自己分析などを各会社の様式に応じて記述しないとイケません。いろいろな会社をみてみたいですから、何十もの書類を作成する人もいます。その文章量は相当なもので多大な労力と時間を要しますので、研究どころではありません。その後、やっと面接（1次、2次…）などの次の過程へと進むようです。

このように就職活動の変化には、いろいろな原因があるように思えます。まず、第一にインターネットの功罪が挙げられます。インターネットにより会社の情報を簡単に得ることができるようになりましたが、それは全ての学生にいいことであり、情報過多になった分、選択肢が増え、学生の負担がむしろ増えたのではないのでしょうか。また、そのような手続きはすべて電子メールで行います。封筒に住所を書いたり、切手を貼ったり、電話を担当者にかけてたりしなくていいのは一見すると楽ですが、これも全ての学生に共通であり、「とりあえずだしてみよう」といった志望者の増加の原因になっているでしょう。私たち研究の世界でも、電子メールで研究が効率的に進めることができるようになったと感ずることはありますが、欲しくない部類のメールが気安く、しかも大量に送られてくるため、時間はむしろなくなったと感ずます。

第二に絶対的な価値観の崩壊です。以前は、大きい会社＝良い会社という物差しがありましたし、研究室の先輩や教授が勧めるところにいけば良いだろうと考える風潮がありました。しかし、一般企業にとって終身雇用制は今や風前の灯であり、時代は大きく変動しています。絶対的な物差しがなくなったので、先輩や教授らに頼るのではなく、自分で動いて、自分の物差しで判断したいと考える傾向があるようです。インターネットに溢れる情報や就職セミナーで得る情報からどこまで正しく判断できるかは私にはよくわかりませんが、過信は禁物でしょう。

第三に大学院生としての自覚の問題です。日本の大学は大学院生でも授業料を納付しないといけません。大学（指導教授）に雇用され一人前の研究者として扱われる海外の大学院生に比べて、大学生気分が抜けないのは致し方ないことかもしれません。しかし、この点は今も昔も同じです。ただ、大学院に入ったら勉強ではなく研究

を実際に行い、スキルアップするという志を持った学生が減っているように感じます。むしろ、大学院を六年一貫の大学の最後の二年ととらえているようです。

最後に企業の倫理観の問題です。会社が優秀な学生をとりたい気持ちはわかりませんが、超のつく青田買いはほどほどにして欲しいと思います。さらに就職が決まった学生に対し、すでに社員教育として過酷なレポートを課しているところもあります。このような規制緩和は、大学の教官にとって本当に困ることです。海外の研究グループとの競争力を落とすことにもつながりかねないと懸念します。

こうしてみると、大学の教官が良く言う「学生の気質が昔と変わった」という問題は、学生だけの責任ではなく、大学、企業も含めた日本の社会全体の問題としてとらえる必要であるように思えます。

(直交ダイマー)